

【2021 年度優秀卒業論文】

ハイデガー「技術とは何だろうか」における現代技術

馬場 萌未

序論

以前はそうではなかったはずが、もはや私たちの生活にテクノロジーは不可欠なものになってしまった。そして私たちは、時としてそれらが脅威となりうることも知っている。現代の人間を取り巻くテクノロジーとはどのようなものであり、人間をどのように変化させるのか。マルティン・ハイデガーは、際限なく高度化する技術と、あらゆるものが生産効率化のために用いられる現状に対して「現代技術とは何か」、そして「現代技術のどういった点が新式なのか」（ハイデガー 2019a, p. 112）と問うた。それは、彼が「技術との自由な関係を何かしら準備したい」（ハイデガー 2019a, p. 96）と願ってのことである。本論文では、彼の技術に関する思索の中心的テキスト「技術とは何だろうか」から、彼が描いたその現代技術像を浮かび上がらせることに試みる。

この問いの意義を明確にするために、当時の時代背景について触れておきたい。ハイデガーの技術論は、当時の社会に応答している。そのひとつは、現代技術の極地とも言える原子力の登場だ。

國分功一郎は、1950年代が原子力の開発にとって重要な時期であることを指摘する¹。第二次世界大戦後、アメリカとソ連によって水爆実験や原子力発電の開発が進められ、1953年12月にはアメリカのアイゼンハウアー大統領が国連にて「原子力の平和利用（Atoms for Peace）」という演説を行った。当時は原子力を適切に制御して利用することで、更なる生活水準の向上が見込めるといふ大きな期待が抱かれていた。被爆国である日本においても例外ではない。「原子力の平和利用」というスローガンに魅了され、誰もがその可能性を信じていた。しかし國分が指摘するように、いち早く原子力の危険性を指摘したのがハイデガーであった²。彼は、原子力をはじめとする機械が制御不能に陥り、殺人的に機能する可能性のために危険だとしたわけではない。「真の脅威は、人間をその本質においてすでに襲っています」（ハイデガー 2019a, p. 136）と言い、哲学者として、現代技術の全面的な支配がもたらす危機を指摘した。

¹ 國分 2019, pp. 54-68 にて特に詳細に論じられている。

² 國分 2019, p. 104。

またハイデガーの技術論は、現代の資本主義社会への批判でもある。資本主義システムは、人間を終わらなき労働と消費のサイクルに参加させ、そのサイクルを動かすための歯車となるように強いる。これは現代技術があらゆるものを効率化し、生産性の向上を追求する性格を持つことに由来する。

現代技術が支配するこの時代には、かつてはなかったような異様な雰囲気が漂っているのだ。それゆえにハイデガーはかつての技術と、現代の技術を区別し、改めて現代技術とは何かを問うた。彼の技術論は古典的な技術や芸術への思索でありながらも、一方では痛烈な社会批判としての側面を持つ。

さて、ハイデガーがその技術論を展開したテキストは複数ある。本論で扱う「技術とは何だろうか」は、1953年11月にミュンヘンで行われた講演会「技術時代の芸術」での原稿をもとに、翌1954年に単著『講演と論文』で出版されたテキストである。そのほかに、1949年にブレーメンで行われた「有るといえるものへの観入」と題された「物」「総かり立て体制」「危機」「転回」からなる一連の講演、1951年の講演「建てること、住むこと、考えること」、1955年に彼の故郷メスキルヒで行われた講演「放下した平静さ」などが挙げられる。

彼の思索は、多くの講義や講演を通じて深められていった。しかし、森一郎によれば、その中でも「技術とは何だろうか」はそれまでの各講演をまとめた総論的な意味を持ち、他の講演より直接的に「技術の本質」を問うている³。単著として出版された『講演と論文』で冒頭に据えられていることから、彼がこの講演に注力していたことが分かる⁴。

本論文では、ハイデガーが「技術とは何だろうか」で提起した現代技術像を浮かび上がらせ、現代技術が持つ特異性について論じる。それは、あらゆるものを利用可能なものとして還元する、かり立てることの連鎖である。

議論は以下のように進む⁵。

現代技術の問題に取り掛かる前に、技術が過去にどのようなものとして規定されていたのかについて確認する。ハイデガーの議論を辿るとともに、後に示される現代技術が、かつての技術といかなる相違点を持つのかを対比させ、より明確にするためでもある。ハイデガーは技術を、広義で産み出すことを意味するギリシア語の概念「ポイエーシス」のはたらきであると捉え、さらに技術をその語源に立ち返ることで定義しなおした。この定義は主に「技術とは真理を明かすことである」ということに集約される。現代技術についての考察に先立って、技術が元来真理を開示する性質を持つことについて明らかにする（第1章）。

次に、現代技術の問題に入る。現代技術がこれまでの技術とは決定的に異なる由来とされる、自然を「挑発」する性格を確認し、ライン川の水力発電と伝統的な橋を対比することで

³ 森 2020, pp. 120-1。

⁴ ハイデガー 2019『技術とは何だろうか 三つの講演』森一郎 訳、講談社学術文庫、p. 13、「編訳者まえおき」より。

⁵ 本論文では、邦訳は森一郎 訳「技術とは何だろうか」（2019年『技術とは何だろうか 三つの講演』講談社学術文庫）を用い、ハイデガー独特の述語も基本的にこれに従うこととする。

その性質の違いを明らかにする。そして現代においては、自然や人間までもが一種の在庫として扱われているというハイデガーの主張を確認する（第2章）。

続いて、ハイデガーが現代技術の本質であるとする、「総かり立て体制（Ge-stell）」について、それがいかなる性質を持つものであるかを論じる。また、その語の構造を明らかにし、邦訳の妥当性を検討する。ハイデガーへの批判として、どんな技術でも自然を挑発する要素があり、現代技術にのみ固有なものではない、とする加藤尚武の批判を検討し、それへの応答を試みる（第3章）。

現代技術という語は、今日では科学技術を意味している。科学と技術の関係に関して、現代技術の本質が科学の成立をもたらしたというハイデガーの主張を明らかにする。そしてこれまでの議論を踏まえて「現代技術とは何か」という問いに回答を与える（第4章）。

総かり立て体制は、「運命の巧みな遣わし」であるとされる。運命の巧みな遣わしについて、それが未来を積極的に規定する宿命ではないという性質を説明し、ゆえにそれ自体が危機であるということ、さらに総かり立て体制が人間に対して真理への関わりを断つという点で最大の危機となる可能性について説明する（第5章）。

第1章 顕現させること

1-1. ポイエーシス

ハイデガーは技術というものを、真理へ関わる問題であると考ええる。

技術とはたんに手段ではありません。技術とは、顕現させるあり方の一つなのです。この点に注目すれば、技術の本質のためのまったく別の領域が、私たちに開かれてきます。それが、顕現させること、すなわち真相・真理という領域なのです。(ハイデガー 2019a, p. 109)

一般的に、技術とは何か目的を達成するための手段であり、人間の行いであるとされる。ハイデガーはこれを「道具手段的かつ人間学的な技術規定」(ハイデガー 2019a, p. 98)と呼んだ。彼はこの正しさを認めながらも、技術の本質に至るには未だ不十分だとする。彼によれば、技術とは何かを現れさせるようにすることであり、それゆえに真理に関係する問題なのだ。

技術がある目的を実現するための手段として考えられる場合、それはなんらかの作用を帰結させるという意味で原因の一種だと考えられる。しかし、手段だけが原因なのではない。ハイデガーによれば手段と対になる目的もまた、原因である。目的は用いる手段を決定するからだ。目的も手段も原因のうちに含まれるとするならば、技術とは何かという問いは歩みを進め、次に「原因」を問う。

ハイデガーは「原因」とは何かを問うために、アリストテレス由来の四原因説に遡る。原因はギリシア語でアイティオンと呼ばれ、ハイデガーによればそれは「引き起こした責めを負うもの」という意味である⁶。供物用の銀皿であれば、銀が質量（ヒュレー）、皿という姿かたちが形相（エイドス）、供物に使用され、制作が終わりに至っているということが趣旨（テロス）であり、鍛冶職人がそれら三つを取り集め、熟慮すること（ロゴス）によって制作がなされる。この四つが相互に引き起こした責めを負うことが、制作物の出現の原因となる。

この四つは、いまだ現前的であらざるものが現前にあり続けることへ来着するようにさせます。したがって、この四つは、何らかのもたらすはたらきによって、統一的にあまねく支配されているのであり、それによって、現前にあり続けるものは、出現へともたらされるのです。（ハイデガー 2019a, pp. 105-6）

そこで生じるのは、いまだ現れていないものを出現へともたらすはたらきである。ハイデガーはプラトンの『饗宴』を引用しつつ、この「もたらすはたらき」を「ポイエーシス」のはたらきであると説明した。

ポイエーシスとは、「産み出すこと」や「創作すること」を意味するギリシア語であるが、ハイデガーはこれを「こちらへと前にもたらして産み出すこと〔Her-vor-bringen〕」（ハイデガー 2019, p. 106）だと説明する。「こちらへと前にもたらして産み出すこと」は、未だ現前しないものを出現へともたらす営みであり、銀皿のような道具の制作に代表される手仕事の制作のみならず、芸術的、詩的な創造活動をも意味する⁷。それは一本の木を、その丈夫さを生かして何らかの道具に加工すること、周りの景色と共に絵に描くこと、その美しさを詩に詠むことなど、多様な現し方を含む創造的な営みである。そのようにして、こちらへと前にもたらして産み出されたものは、いずれも「それ自体の固有性を現すようになる」（関口 2021, p. 331）のだ。彼の思索においては、あるものが持つ固有性を生かして現すことが、ポイエーシスのはたらきであるといえるだろう。

以上を踏まえると、技術は未だ現前していないものを制作物としてこちらへと前にもたらして産み出す、出現させる、という意味でポイエーシス的な行為なのである。さらにそこにはあるものの固有性を発揮させる創造性が認められる。では、このことがなぜ真理の問題と関わるのだろうか。

ここで指摘されるべきことは、ハイデガーにおける「真理」という語の扱われ方だ。彼の哲学における真理とは、「隠れなさ」という意味を持つ。これは真理を意味するギリシア語

⁶ ハイデガー 2019a, pp. 101-2。

⁷ さらに彼が最高のポイエーシスだとするのは、「ピュシス〔*physis*〕、つまりおのずから現れ出ること」（ハイデガー 2019a, p. 106）である。花の内に秘められた力が解放されて、つぼみが開き立派に咲く。このような自然現象もポイエーシスの「産出」や「発生」の作用とされる。

アレーテアが、否定の接頭辞「ア」と、「隠れていること」や「忘却」を意味する語「レーテー」から成ることに由来する⁸。隠れている状態から覆いを取り去って、隠れなさへと歩み出ることが真理の現れである。

ゆえにポイエーシス、つまりこちらへと前にもたらしして産み出すことは、「隠されたさまのほうから、隠れなき真相〔Unverborgenheit〕」（ハイデガー 2019a, p. 107）へと明るみに出すことであり、ギリシア語でアレーテウエイン、真理開示の一種だと理解される。

アレーテアに由来するこの真理開示は「顕現させること〔Entbergen〕」（ハイデガー 2019a, p. 108）と呼ばれる。技術は単なる手段であるのではない。それはポイエーシスのたらしきであり、真理開示を担う、顕現の一様式なのである。技術への問いは、真相・真理に通ずる問題であるのだ。

1-2. テクネー

ハイデガーは次に技術という語の語源を遡り、再度、技術が顕現の一様式であることを根拠づける。

技術（Technik）は、技術知を意味するギリシア語テクネー（*technē*）に由来する。ハイデガーはテクネーの語義に関して、二つ注意を促す。

一つ目は、テクネーが「手仕事のなことを行なったり、それができたりすることを表わすばかりではなく、高次の技芸や造形芸術も表わす」（ハイデガー 2019a, p. 109）ことだ。技術という言葉が現代において理解されている仕方とは異なり、古代ギリシアではテクネーは芸術的な営みと技術的な営みを区別することなくその語義に含んでいた。その性質はポイエーシスと共通することから、テクネーはポイエーシスに属す、^{ポイエーシス}創作的な活動であるとされる⁹。技術知テクネーはポイエーシスという創作活動を導く知として位置づけられるのだ。

二つ目はテクネーとエピステーメーの連関である。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』で「真を認識（アレーテウエイン）するところのもの」として技術（テクネー）・学（エピステーメー）・知慮（フロネーシス）・智慧（ソフィア）・直知（ヌース）を挙げた¹⁰。テクネーとエピステーメーは両者とも、真理認識に通ずる知であり、顕現させることの一種なのである。

ここでハイデガーが強調するのは、『ニコマコス倫理学』でテクネーとエピステーメーが「両者が何を顕現させ、いかに顕現させるか、という点で対比」（ハイデガー 2019a, p. 110）されることだ。両者ともに、知の一種であり、真理を明らかにする。しかしエピステーメーが認識するのは「それ以外の仕方においてあることのできないもの」（アリストテレス 1971,

⁸ 古荘 2021, pp. 286-7。

⁹ ハイデガー 2019a, p. 109。

¹⁰ アリストテレス 1971, p. 286。

p. 286) であるのに対し、テクネーは「場合によってさまざまな外観を呈しうるし、さまざまな結果になりうるようなものである」(ハイデガー 2013, p. 24)。テクネーが現す真理とは、唯一の解ではなく、多様な姿が想定可能なのだ。

テクネーが真理認識に携わる知であるとするれば、テクネーにおいて決定的なことは道具の取り扱いの巧妙さや、実際の製造段階にあるのではない。様々な外観をとりうるものの姿かたちや材料を四原因に照らしつつ、その都度適当に顕現させることが、テクネーが意味するところであるといえるだろう。

技術の語源へと立ち返り、古典を遡ると、やはり「1 - 1. ポイエーシス」で辿った議論と同じ結論を導くことができる。技術は元来、真理へと通ずる活動なのであり、顕現の様式なのである。

第2章 挑発

2 - 1. 挑発

技術というものが元来どのようなものであったかを考察したうえで、ハイデガーは改めて現代技術の問題にかえる。現代技術ももとを辿ればテクネーに由来するがゆえに、真理を顕現させる仕方であり「顕現させることの一種」(ハイデガー 2019a, p. 112) である。しかし現代技術における顕現することとは、テクネーやポイエーシスにおける顕現させることとは性質が異なる。

では、現代技術に固有な顕現させること、とはどのような顕現のあり方か。

現代技術において支配をふるっている顕現させることは、一種の挑発すること〔Herausfordern〕です。つまり、自然をそそのかして、エネルギーを供給せよという要求を押し立て、そのエネルギーをエネルギーとしてむしり取って、貯蔵できるようにすることです。(ハイデガー 2019a, p. 112)

現代において支配的なのは「挑発」としての顕現させる仕方である。それは、自然を相手にしてエネルギーを供給するように注文をつけ、排出されたエネルギーを搾取し、貯蔵する。「強要」を伴う仕方である。その際、自然はエネルギー源として現れることとなる。

かつて農夫が畑を耕していたときの、その耕すこと〔bestellen〕はまだ、世話する、面倒をみる、という意味でした。農夫のこの営為は、耕地をべつに挑発しません。穀物の種を播いては、種子の生育力にゆだね、その生長を見守るのです。しかしいつしか、土地耕作も、自然をかり立てる別の種類のベシユテレン〔Bestellen〕、つまり徴用して立てることに吸い込まれてしまいました。こちらのベシユテレンは、挑発するという意味で

自然をかり立てるのです。農業は今や、機械化された食糧産業なのです。(ハイデガー 2019a, p. 113)

ベシュテレン (bestellen) というドイツ語には「畑を耕す」ことや「手入れをする」「世話をする」という意味があるが、同時に「注文する」「予約する」という意味もある。かつての農夫が自らの手で畑を耕し、種子の生長にゆだねて作物が育つのを見守ることは、世話をするという意味のベシュテレンであった。しかし、現代の機械化された食糧産業はかつてのように大地を耕して手入れする姿勢を失い、大地に対して注文をつけるという意味のベシュテレンへと吸収されてしまった。「徴用して立てる」と訳されるこの意味でのベシュテレンは、土地に作物の生育を要求して、土地を作物の生産へと急がせ、追い立てる。現代の機械化された食糧産業は「挑発するという意味で自然をかり立てる」のである。挑発、かり立て、徴用して立てるというキーワードは、さしあたり同義で扱われていると考えて問題ないだろう。

ハイデガーは石炭や鉱物の採掘も例にとる¹¹。ある地域が開発され、地下に蓄えられている石炭や鉱物が採掘される。すると、それまで地層の一部として長い間静かに存在していた石炭や鉱物は、天然資源として再発見され、その地域は以降、炭鉱地区、鉱床地帯と化す。炭鉱の開発という自然の挑発を通して、それまでの大地としての姿は失われ、その地は天然資源が埋蔵されたエネルギー源としての様相を呈す。この大地の性格の変容は、まさに現代技術の「顕現」させるはたらきによるものであると言えるだろう。

ハイデガーは、徴用することに関して、次のような特徴に言及する。

しかしながら、この促進はあくまで、別のものを促進することに向けて、すなわち、最小の費用で最大限の効用が得られるように前へ押し進めてゆくことに向けて、あらかじめ派遣して立てられています。(ハイデガー 2019a, p. 113)

自然の挑発は、一度きりで完了するのではない。排出された自然のエネルギーは、他の活動へとさらに用いられるためにその都度、連続的に位置づけられている。採掘された石炭のエネルギーは熱として利用され、熱は蒸気を発生させることに、そして蒸気が機械を稼働させ、工場はモノを生産することへと挑発されている。それぞれの活動は費用対効果が最大となるように推し進められ、全体の効率性を損なわないように、そして最大の生産性を実現するように整えられている。

現代技術は自然を挑発し、かり立て、徴用する。それによって自然はエネルギー源として顕現させられるに至る。ポイエーシスは、あるものが持つ固有性を発揮させる創造的な豊かさを含むのに対し、挑発することはあるものの生産性を引き出し、最大化することが唯一の

¹¹ ハイデガー 2019, pp. 112-3。

関心事である。この挑発することを伴う仕方が、現代技術に固有な顕現の仕方だ。

2-2. 二つの顕現すること - ライン川の水力発電と橋 -

ハイデガーは現代技術の象徴的な例として、ライン川を取り巻く水力発電所をあげ、川にかかる伝統的な橋と対比する。この対比は講演「建てること、住むこと、考えること」で取り上げられた橋の例が意識されたものであると考えられる。「技術とは何だろうか」では詳細に論じられることはないが、二つの顕現の違いが描き出される部分であるため、その箇所を取り出してみたい。

「技術とは何だろうか」でハイデガーはライン川の水力発電所を例にとり、以下のように述べる。

水力発電所がライン川に建てられているさまは、何百年も前から岸と岸とをつないできた昔ながらの木造の橋とは異なっています。むしろ、川の流れは発電所のうちへ立て塞がれています。川が川として今現に何であるかといえば、要するに水圧供給係なのですが、そのことは発電所の本質から来ているのです。(ハイデガー 2019a, p. 114)

発電所では、ライン川の水が、そして種々の機械や部品が電力発電のために徴用されている。発電所という現代技術に接続されたライン川は、一連のかり立てに取り込まれ、「水圧供給係」として顕現させられる。

一方で「建てること、住むこと、考えること」では、橋が川の流れを周囲の景色と結びつけ、すぐれた形で顕現させる様が以下のように述べられている。

橋は、両岸と一緒にあって、それぞれの背後に広がる岸辺の景色を、川の流れに結びつけます。橋は、川と岸と陸を、おたがい隣合わせの関係にします。橋は、川のほとりの岸辺の風景としての大地を、取り集めるのです。そのようにして橋は、緑なす水辺に沿って、川の流れに連れ添うのです。(ハイデガー 2019b, p. 75)

橋は、川の流れを岸や周辺の景色と結びつけつつ、川の流れに寄り添う。その際に川は何か他のものとして顕現させられるのではない。川は、周辺の景色とひと続きの関係の内で見出されるように顕現させられつつも、それらに取り込まれてしまうことなく、流れる川であり続ける。

橋のそれと対比してみると、ライン川の水力発電所では川はもはや川であり続けることはできず、「水圧供給係」という発電所の付属施設として、発電所のうちへと埋没してしまう。現代技術のかり立てによって、自然の姿は曇り、歪められてしまう。

2 - 3. 徴用物資

現代技術は、自然を挑発して顕現させる。そうして現れ出たものは、固有の状態を持つ「徴用物資」と名付けられる。徴用物資はどのような性格を持つのだろうか。

では、挑発してかり立てることによって成立するものには、いかなる種類の隠れなき真相が固有なのでしょうか。至るところでそれは、その場その場に整列するように徴用して立てられており、それも、さらなる徴用して立てることのためにそれ自身が徴用可能となるように、整列させられています。そのように徴用して立てられたものは、固有の存立状態〔Stand〕をもっています。これを、徴用して立てられた物質、つまり徴用物資〔Bestand〕と名づけましょう。(ハイデガー 2019a, pp. 115-6)

現代技術においては、生産性を最大化することに全てがかかっており、システムの全体が滞りなく進むよう効率化されることが重要となる。そのために徴用して立てられた個々のものは「整列」させられ、「固有の存立状態」を持った「徴用物資〔Bestand〕」として現れる。

徴用物資は、ドイツ語で「現在高」「在庫品」を意味する語、ベシュタント (Bestand) であり、徴用を意味するドイツ語ベシュテレン (Bestellen) の名詞形である。ベシュテレンが「注文する」「予約する」という意味のドイツ語であることは先にも述べた。その名詞形であるベシュタントは注文に対応する「在庫」であり、ハイデガーは、徴用 (ベシュテレン) に応じるものである徴用物資 (ベシュタント) に在庫という性質を見出している。

徴用物資は、それ自身徴用可能なものとして更なる徴用に備えて整列し、待機するという意味で、「在庫」という性格を帯びている。「在庫」の性質においては取り替え可能であることが重要で、不足すれば同じ規格のものを取り寄せて補充することができるように、仕様が統一されている。不足した分の在庫が補充される際、または機械の部品が交換される際、それらの仕様が前のものと同じでないと、その都度全体を調整し直さなければならなくなり不便だ。貯蔵と流通の効率化の実現のために、等しく整えられたものが在庫である。

つまり在庫化することは、一つひとつの固有さを削ぎ落として一様なものへと還元し、生産システムの中に落とし込むことである。そうすることであらゆるものは徴用可能なものとなる。電力や、市場に出回る商品などの在庫が持つこのような「可動在庫という存在性格」(森 2020, p. 153) をハイデガーは「徴用物資〔Bestand〕」と呼ぶ。

現代技術は、自然をはじめ、あらゆるものをかり立て、徴用物資として利用可能な存在へと顕現させる。これはポイエーシスがあるものの固有性を発揮させることと対照的な、現代技術風の顕現の仕方だと言える。

ところが、徴用されるのは自然や、市場に流通する商品だけではない。ハイデガーは「人間もまた、徴用して立てられた物資に属しているのではないのでしょうか」(ハイデガー 2019a, p. 118) と言う。彼は「人材」や「臨床例」という言葉を例にとる。人材は人間を労

働力の人的資材として、そして臨床例は患者を医療における実験のサンプルとして扱うことを意味する。人の労働力はまさに人材市場で取引され、その市場では仕事の生産性に関係する能力によって各人の利用価値が決定される。労働力が不足すれば同じ能力を持つ次の人材が補充され、不要になれば契約解除となる様はまさに在庫のようだ。現に、パートタイムや有期雇用契約、人材派遣という言葉は人が労働力の可動在庫として扱われることをよく示しているように思われる。現代では、人間までもがあたかも在庫のように取り扱われ、徴用物資となるに至っているのだ。

第3章 総かり立て体制

3-1. 総かり立て体制

挑発することは人間の行いである。しかし、ハイデガーによれば「人間は、自然エネルギーよりもいっそう根源的に挑発されて」（ハイデガー 2019a, p. 118）いるという。「というのも、徴用して立てるように仕向けられているから」（同前）である。人間は自身が徴用されて在庫として取り扱われるだけでなく、自然をはじめとする他のものを徴用するように仕向けられている。つまり、自然をかり立てるように、人間がかり立てられているのだ。

それは何者によってか。その正体は、「総かり立て体制（Ge-stell）」である。

総かり立て体制とは、人間をかり立てる、すなわち徴用して立てるという仕方で現実的なものを徴用物資として顕現させるよう挑発する、かのかり立てるはたらきを取り集めるものことです。（ハイデガー 2019a, p. 122）

総かり立て体制とは、人間をかり立てて、他の人間や自然を徴用するように仕向ける巨大な枠組みを指す。人間が主体となって自然をかり立てているのではない。人間自身が総かり立て体制に飲み込まれ、そうさせられているのだ。

技術といって連想される工場の機械や、コンピューターなどの具体的なものは、総かり立て体制に属するものではあるが、それ自体が総かり立て体制に当たるわけではない。総かり立て体制は普段我々が目にするようなものではなく、しかし人間の行動や意思決定に影響を及ぼすように影で采配を振る。ハイデガーは、この総かり立て体制こそが現代技術の本質であるとする。

このことは現代の資本主義社会にも見てとることができるだろう。現代人は労働と消費、そして更なる労働と更なる消費へとつき動かされている。最終的な目的を持たないまま、ひたすら拡大再生産へと邁進していく様は何者かに操られているかのようだ。それを影で牛耳るのが総かり立て体制であり、人間のそうしたふるまいは総かり立て体制に由来するといえるだろう。

3-2. 総かり立て体制(Ge-stell)の邦訳について

総かり立て体制を意味する Ge-stell という語はハイデガーによる造語である。日常的に使用されるドイツ語を組み合わせ一つの語にするハイデガー独特の表現の一種であり、複数のドイツ語と響き合いながら意味を形成している。そのため日本語に直訳することは容易でなく、様々な邦訳が試みられている。以下ではそのドイツ語の構造を分析するとともに、Ge-stell に対して「総かり立て体制」以外の訳語を引くことで原語の語感を明らかにしたい。

「普通の意味では、「ゲシュテル」という語は、一種の器具のことを意味します」(ハイデガー 2019a, p. 121)とハイデガーが述べるように、ハイフンなしの Gestell は、「枠構造をもった器具」(同前)を指し、ラック、台座、骨組などを意味する。例えば書架 Büchergestell は、本の複数形 Bücher と Gestell から成る。さらに Gestell は人体の枠組みである「骨格」や「骸骨」というも持つ。ハイデガーは、Ge-stell が骸骨という語と同じ音であることにゾッとするような不気味さが伴うことも指摘している¹²。

stell を語幹とする不定詞の stellen は通常、ものを垂直に立てて置く、起こすという意味である。渡邊二郎はここでの stellen の語義について、通常の「立てる」という意味で使われているのではないと注意を促し、以下のように指摘する。この文脈において stellen という語は、特に狩猟の際に猟犬が獣を追いつめ、「立ちすくませ、こうして自分の支配下に置くこと」という特有の意味合いで用いられているのであり、ハイデガーがこの意味を生かして、現代技術が自然を追い詰めて収奪することを述べていることが重要だ¹³。

しかし stellen はそのような挑発だけを意味しているわけではない。ハイデガーはポイエーシスとしての「立てる」ことつまり、「こちらへと前にもたらしつつ制作して立てること」(ハイデガー 2019a, p. 123)と、現代技術が「挑発しつつ徴用して立てる」(同前)ことの親近性を指摘する。なぜなら「どちらも顕現させること、つまりアレーテイアのあり方」(同前)であるからだ。stellen という語では、現代技術が自然を追い詰めて収奪することでありながらも、顕現の一種であることが示唆されている。

ハイフンで区切られた Ge は、それ単体では集合名詞を意味する接頭辞である。山々 [Berge] が、山脈 [Gebirg] となるように用いられる。

以上をまとめると、Ge-stell は stellen の集合名詞であり、「stellen 立てる」ことの集合体であることを意味する語として受け取ることができる。ここでの「立てる」ことは現代技術がポイエーシス同様に顕現の一種であることを視野に捉えながらも、その手法はポイエーシスとは全く異なる「追いつめて収奪する」ことを意味している。

以上を踏まえ Ge-stell の邦訳を検討したい。邦訳はこれまでに様々な試みられている。瀧将之によってまとめられた¹⁴Ge-stell の訳語を次の表 1 にまとめ、さらにそれ以降に出版さ

¹² ハイデガー 2019a, p. 121。

¹³ 渡邊 2008, p. 236。

¹⁴ 瀧 2003, pp. 145-8。

れるなどして、加えられるべきものを追加した¹⁵。

表 1

創文社版ハイデッガー全集		
全-仕組み	濱田恂子、I.ブフハイム訳	第4巻『ヘルダーリンの詩作の解明』(1997)
集-立	辻村公一、H.ブフナー訳	第9巻『道標』(1985)
	亀山健吉、H.グロス訳	第12巻『言葉への途上』(1996)
	東専一郎、芝田豊彦、H.ブフナー訳	第13巻『思惟の経験から』(1994)
	大橋良介、H.ブロッカルト訳	別巻1『四つのゼミナール』(1985)
総かり立て体制	森一郎、H.ブフナー訳	第79巻『プレーメン講演とフライブルク講演』(2003)
理想社版ハイデッガー選集		
仕組み	大江清志郎訳	第10巻『同一性と差異性』(1960)
立て-組	小島威彦、アルムブルスター訳	第18巻『技術論』(1965)
組-立	柿原篤弥訳	第22巻『有への問いへ』(1972)
		第30巻『ヘルダーリン論』(1983)
仕-組み	佐々木一義訳	第23巻『ヒューマニズムについて』(1974)
その他の邦訳書		
巨大-収奪機構	渡邊二郎訳	『ヒューマニズムについて』(1997) 筑摩書房
研究書		
組-立	大橋良介	『放下・瞬間・場所』(1980) 創文社
立て集め	茅野良男	『中期ハイデガーの思索と転回』(1985) 創文社
集-立	辻村公一	『ハイデッガーの思索』(1991) 創文社
立て-集め	細川亮一	『意味・真理・場所』(1992) 創文社
集立態(※)	秋富克哉	『芸術と技術 ハイデッガーの問い』(2005) 創文社
挑発性、搾取性、有用性(※)	加藤尚武	『ハイデガーの技術論』(2003) 理想社

「集-立」「立て-組」「組-立」「立て集め」「立て-集め」「集-立態」などは、Ge-stell が立てることの集合体であるというドイツ語の構造を残した邦訳だと考えられる。「全-仕組み」「仕組み」「仕-組み」も同様にドイツ語の構造を意識しながら、Ge-stell が人間を挑発することへとかり立てる巨大なシステムであることが「仕組み」という語で示唆されている。

以上は Ge-stell がドイツ語の語感に沿って訳されているが、Ge-stell の語の意味をその日本語から汲み取ることは難しいように思われる。

対して、「総かり立て体制」、「巨大-収奪機構」はより語の意味が反映されている。先にあげた訳語と異なり、stell という語が、単なる「立てる」という意味ではなく「挑発」という意味で「かり立て」や「収奪」として訳出されている。ハイデガーが指摘するように、ポイエシスとしての「制作して立てること」と、現代技術における「挑発しつつ徴用して立てること」は、両者ともに顕現の仕方であるという点で共通しており、そこには一貫した関係性があるだろう。しかしだからといって挑発という意味合いを弱めてしまうと Ge-stell の語義が曖昧になってしまう。現代技術の本質を示す語である以上、Ge-stell が持つ「挑発する」という意味がより強調されるべきだと考えられる。

¹⁵ 引用者が追加したものについては(※)を付した。

加藤尚武は Ge-stell に「挑発性」という語をあて、そのほかに「搾取性」「有用性」という語で置き換えても差し支えないと提案する¹⁶。挑発性、搾取性は Ge-stell のかり立てる性質を示しているが、有用性はより広義に思える。有用に、役立てて用いること全てがかり立てに該当するかと言えばそうではない。例えば、ある木の丈夫さに有用性を見込んで何かしらの道具を制作することは、一概にかり立てだと言うことはできないだろう。有用性という語では一部ではポイエーシスとしての制作の範囲と重なってしまい、Ge-stell の語義がうまく表されないのではないかという疑問が残る。

「総かり立て体制」をはじめ、「挑発」「徴用」という語から感じられる戦時用語的な語感、ハイデガーが総かり立て体制 (Ge-stell) に「召集」(Gestellung) や「召集令」(Gestellungsbefehl) という語を重ね、戦時下の総動員体制を意識した政治的批判的な意味を含ませていたことに由来する¹⁷。総力戦の戦時下では「徴用令」によって金属をはじめ様々な物資がかき集められ、人間は兵士として「徴兵」される。この場合の兵士は、不足が出ればまた誰かが徴兵されて戦線に投入される代替可能な存在である。

しかしそれだけではない。この徴兵は戦後も変わらず続いているのであり、現代では人は労働へとかり立てられ、拡大再生産に邁進している。森は戦時下から続くこの総動員体制を踏まえて、Ge-stell を「総かり立て体制」、Bestellen を「徴用して立てること」と翻訳したとしている¹⁸。

3-3. 加藤尚武のハイデガー批判

ハイデガーは、現代技術における顕現させることとは一種の挑発であるとした。そのうえで、風車を例に挙げて以下のように述べている。

しかし、このことなら、昔ながらの風車にも当てはまるのではないか。いや、そうではありません。風車のつばさは、たしかに風で回りますし、風が吹くままにじかに任せられています。しかし風車は、気流のもつエネルギーを開発して、そのエネルギーを貯蔵する、などということはしません。(ハイデガー 2019a, p. 112)

彼によれば、伝統的な風車の仕事は自然のかり立てには該当しない。ここで言及されている風車とは風力発電に用いられるものではなく、羽根が回転することによって碾石が動き、粉を挽く仕組みになっている風車だ。確かにその風車はライン川の水力発電のように、自然のエネルギーを貯蔵して、遠くまで配給することはしない。しかし、自然をその動力とする点は、風車もライン川の水力発電と変わらないように思える。

¹⁶ 加藤 2003, p. 32。

¹⁷ 瀧 2003, pp. 145-7。

¹⁸ 森 2020, p. 157。

これについて加藤は、風車にも自然をかり立てる性格があることを指摘する。なぜなら、風車はペルシアで発明され後にヨーロッパに伝来した技術で、当時のヨーロッパからすればとしてはまさに最近の技術であったこと、その風貌は組み立てられたものという意味で Ge-stell と呼ぶに相応しい不気味さを持っていたこと、風車はその製粉技術によって人々の往来を盛んにし、街に活気をもたらすという意味で一種のかり立てであったと言って差し支えないようであるからだ¹⁹。

さらに加藤は以下のように述べる。

ハイデガーは、風車とか昔の森番には、ギリシヤ的な「ポイエーシス」（本質を現われさせるという意味での制作）の存在を認め、挑発性〔総かり立て体制〕の支配下に置かれた近代技術と対比する。この対比そのものが間違っている。昔の風車も、昔の森番も人間が必要な要素を自然物から取り立ててくることには変わりがない。挑発性〔総かり立て体制〕は、近代技術の本質ではなくて、どのような技術も一面では挑発性〔総かり立て体制〕なのである。（中略）素朴なものとは不自然なものという誰にでも分かる枠組みに、郷愁をそそる風車と毒々しい近代技術とを割り当て、その分け方が何か本質的なものであるかのように思わせるトリックだけが、ハイデガーの固有性なのである。（加藤 2003, pp. 27-8）²⁰

加藤は、風車であれ芸術作品であれ、自然を取り立てて利用していることには変わりはないと指摘し、それが技術の本質的な区分けではなく、講演上の演出にすぎないとする。

ハイデガーがいう現代技術に固有な顕現のさせ方とは、自然を開発するという意味で挑発し、徴用物資として顕現させることだ。ライン川の水力発電所はダムの開閉によって水量が調節され、最適な水量が保たれるように開発される。水流は熱へ、熱は電力へ変換される。その過程では、水流という自然のエネルギーが電力という形式で徴用物資と変換され、無駄のなく安定したエネルギー供給を実現している。風車で粉を挽くこと、芸術作品を生み出すことが自然を素材として必要とすることは確かだが、そうして顕現された自然は画一的な仕様で揃えられた徴用物資の様相を呈しているだろうか。産業という全体性に取り込まれているだろうか。そうではない。風車は天候に左右され、風のない日には稼働せず、風が一定以上の強さになるとエネルギーを余計に貯蔵しておくことなしに受け流してしまう。風車は特定の産業の効率性を実現するために、風を挑発したり、徴用物資として、いつでも利用可能なものとして準備しておいたりしない。

目新しい技術であることや、見た目の歪さ、それが人々に活気をもたすことは、一見ハ

¹⁹ 加藤 2003, pp. 24-7。

²⁰ 加藤は Ge-stell の邦訳として「挑発性」をあてている。総かり立て体制を意味する語であることを示すため、引用文中では「挑発性〔総かり立て体制〕」と併記する。この併記は引用者によるものである。

イデガーの指摘する現代技術の特徴に当てはまるように思われるが、それらは現代技術が生産性や効率性の尺度のもと、全てを徴用物資に還元するという点を見逃しているのではないか。芸術をはじめ、自然を利用する活動の全てが挑発に当たるといふ指摘に対しても同様である。

第4章 現代技術

4-1. 科学と技術

現代の私たちが、身の回りの現代技術的なものを指し示そうとして「テクノロジー」という言葉を使うとき、それは科学技術を意味している。第1章で明らかにされたように、技術は元来、手仕事の制作や芸術、詩的創作を意味していたが、テクノロジーという言葉にこれらの意味はない。現代技術という語で言及されるのはもっぱら科学技術であり、現代において、技術は科学と何らかの特別な関係にあると考えられる。

科学理論が実用的な技術に応用される一方で、技術の発展が更なる実験を可能にし、新たな科学理論を導くことに貢献することもある。科学と技術はいまや、一方の進歩が他方の進歩を誘発する相互的な関係にあるといえるだろう。ハイデガーはこの認識の正しさを一応は認めた上で、さらに「決定的な問い」(ハイデガー 2019a, p. 112)を問う。「精密自然科学を利用することをあみ出すことができるような現代技術とは、いかなる本質をもつものなのでしょうか」(同前)、と。

一般的に近代自然科学の開始は、ニュートンらをはじめとする17世紀の科学革命に見てとれ、現代技術の始動は蒸気機関などの動力機械が開発された18世紀後半の産業革命である。それぞれの成立年代順からしてみれば、まず近代自然科学の成立があり、その後現代技術が成立したという図式が考えられる。しかしハイデガーの思索においてそれは、近代自然科学の発展を頼りとして始めて現代技術が発展することができた、ということの意味しない。彼がギリシアの思想家に倣って「原初をなす先なるものは、人間には、最後になってはじめて正体を現わすのです」(ハイデガー 2019a, p. 125)と述べることに従えば、現代技術が産業革命として前面に現れるのは、物事の本質が後になって表面化したことにすぎない。つまり科学の発達に先駆けて、現代技術の成立があったのだという。

この点に関して、彼は次のように述べる。

徴用して立てる人間の態度ふるまいは、近代精密自然科学の勃興に真っ先に示されています。自然科学的に表象して立てる仕方は、算定可能な力の連関と解された自然を、待ち伏せて追い立てるのです。(ハイデガー 2019a, p. 124)

言い換えれば、「近代精密自然科学の勃興」である科学革命以前に、現代技術の本質である

総かり立て体制の萌芽があり、それによって挑発された人間のふるまいの結果、近代自然科学の成立がもたらされたのだ。総かり立て体制の萌芽以降、自然はエネルギーの塊として「算定可能な力の連関」とみなされ、近代自然科学は自然を挑発するために徴用されるようにして成立したのである。近代以降の物理学をはじめとする諸科学は、自然の法則を発露させることで「かり立てられた自然が自白するかどうか、自白するとしたらどのようにしてか、を尋問すべく徴用して立てられる」（ハイデガー 2019a, p. 124）のであり、そのために様々な実験を行う。近代自然科学は先立つ総かり立て体制の要求に応じるようにして引き起こされた、というのがハイデガーの言うところである。

それゆえ、総かり立て体制における近代自然科学の最も肝心な仕事が決定的される。

物理学は次の一点だけは決して断念できないのです。つまり、自然が、何かしら計算上確定可能な仕方で自己申告し、情報システムの一総体として徴用可能なものであり続けること、これです。（ハイデガー 2019a, p. 126）

総かり立て体制に応答するものとして、近代自然科学はもっぱら、自然を検証し、そのエネルギーを様々な値で表して情報システムの中に据えることに従事している。そうすることでそのままでは扱いにくい自然を数値で取り扱うことを可能にし、徴用物資への変換や管理を容易にするためである。これが、総かり立て体制下で成立した科学に託された重要な仕事なのだ。

以上のことは諸科学の特徴であるだけではない。むしろ、自然を徴用可能な存在へと変換するという点においては、近代自然科学の成立をみ出した現代技術の特徴だといえる。

4-2. 現代技術とは何か

現代技術とは、何でしょうか。それもまた、顕現させることの一種なのです。この根本動向にまなざしをじっくり注ぐときにはじめて、現代技術のどういった点が新式なのかが明らかになってきます。（ハイデガー 2019a, p. 112）

これまでの議論を踏まえ、「現代技術とは何か」「現代技術のどういった点が新式なのか」という問いに答えるならば、次のようになるだろう。

現代技術は、総かり立て体制の支配によって進行する徴用して立てることの連鎖である。徴用して立てることは、自然や人間の一切を徴用物資に置き換えることである。

現代技術による挑発、徴用、かり立ては未だ現前しないものを出現へともたらすという意味でポイエーシスと同様に、顕現の様式である。しかしそれは元来テクネーという語が意味したポイエーシスとしての顕現の仕方とは異なり、素材の固有性を発揮させることなしに、生産性の最大化そして全体の効率性の向上のみを一切の基準とする。現代技術によって

顕現させられるものは、画一的に整えられ、更なる徴用のために待機する在庫という性格を備えた徴用物資として顕現させられる。

総かり立て体制の支配のもと、あらゆるものを徴用物資として顕現させることが現代技術に固有な顕現の仕方であり、現代技術が新式である所以である。

第5章 運命と危機

5-1. 運命の巧みな遣わし

ハイデガーは総かり立て体制について、さらに次のように問う。

さらにこう問うてみましょう。この顕現させるはたらきは、あらゆる人間的な行ないの彼方のどこかで起こるものなのか、と。そうではありません。とはいえ、それは人間においてのみ起こるものでもなく、人間によってという要因が決定的基準になるわけでもありません。(ハイデガー 2019a, p. 128)

総かり立て体制は、人間の様々な営みとかけ離れたどこか遠くのところで起こるのではない。しかし人間の間においてのみ起こるものでもなく、人間によって引き起こされているものでもない。ハイデガーによれば、気づいた時にはすでに「人間は総かり立て体制の本質領域内に立って」(ハイデガー 2019a, p. 128) いる。

ではなぜ、現代の人間は総かり立て体制のもと挑発されるに至ったのか。それは、総かり立て体制が、ある種の運命に属するためである。この運命はあらゆる顕現させることへ人間を赴かせるのであり、これをハイデガーは「運命の巧みな遣わし」と呼んだ。総かり立て体制によってかり立てられているとき、人間は運命によってそう遣わされているのである。

しかし、この運命の巧みは遣わしは、総かり立て体制のもとでの顕現させることだけを意味するのではない。

有るといえるものの隠れなき真相は、顕現させるという道をつねにたどります。つねに人間をあまねく支配しているのが、顕現させるという運命の巧みな遣わしなのです。(ハイデガー 2019a, p. 130)

あらゆるものは顕現させられることを経て、出現するに至る。人間はつねに、顕現させるという運命の巧みな遣わしに導かれ、それに応答しているのだ。総かり立て体制によって挑発して顕現するときも、ポイエーシスとして顕現するときも、それらは顕現させるという運命の巧みな遣わしに導きによるものなのである。

注意すべき点は、ここにおける運命とは、「抗しがたい力としての宿命 [Verhängnis] では

ない」(関口 2013, p. 44) ということだ。それは未来の出来事を全て決定してしまう、避けがたい宿命ではない。

むしろ、この運命が積極的に未来について決定しないという点に、来たる危機の可能性を宿していると考えられる。というのは、運命の巧みな遣わしは、相反するふたつの可能性を内包したまま人間に迫るからだ。それは、人間が「徴用することにおいて顕現させられるものだけを追跡し、稼働させ、そこから一切の規準を受け取る、という可能性」(ハイデガー 2019a, p. 132) と「隠れもなく真であるものの本質とその隠れなき真相へと、より先に、より以上に、ますます原初的に、乗り出してゆくという可能性」(同前)である。運命が今後、総かり立て体制へと突き進む可能性へ人間を遣わすのか、ポイエーシスを重んじてより本質的な真理への到達を可能にする方向へ人間を遣わすのか、どちらへ転ぶのかはわからない。その不確実さゆえに「この二つの可能性のあいだに差しかけられて、人間は、運命の巧みな遣わしによって危機に陥っています」(同前)と述べられるのである。

総かり立て体制に至ったのは、それが運命の巧みな遣わしとして遣わされたからである。その運命は、顕現することに関する二つの可能性を宿しつつも、積極的に未来を決定する宿命ではない。それゆえに、顕現させるという運命の巧みな遣わしは、それ自体「必然的に、危機 [Gefahr]」(ハイデガー 2019a, p. 133) なのである。

5 - 2. 危機

運命の巧みな遣わしはそれ自体で危機として人間に迫る。しかしやはり、「運命の巧みな遣わしが総かり立て体制という仕方で支配をふるうとき、それは最高の危機」(ハイデガー 2019a, p. 133) となる。それは「いっそう根源的に顕現させることへと内省的に転回し、かくしていっそう原初的真理の言い渡しを経験することが、人間にできなくなってしまいかねない」(ハイデガー 2019a, p. 136) という事態である。

この危機は連関する二つの観点から示される。

一つは、人間の存在に関わる危機である。総かり立て体制のもとで、あらゆるものは徴用物資と化す。その内では人間自身も労働力として数えられるに過ぎなくなる。しかしそれだけではない。「そのように脅かされている当の人間が、ふんぞり返って、大地を支配する主人の恰好をする」(ハイデガー 2019a, p. 134) に至っている。現代技術はそれが支配的になるにつれ、世界の全てが人間の支配下に収められているかのような「究極の欺瞞的な仮象を結実させる」(同前)。この内で人間は、大地を支配した万能感に浸り、自身が徴用されているということに気づくことすらできない。総かり立て体制は、人間の存在を脅かしながら、人間がその支配に気付くことができないようにさせるのだ。

もう一つは、真理の喪失という危機だ。総かり立て体制のもとでは、あらゆるものはかり立てられるゆえに、ポイエーシスとしての顕現の可能性を追放してしまう。すると自然は、もはやエネルギー源としてしか現れなくなってしまうのであり、芸術の光のもとで自然を

見ることをはじめとして、ポイエーシス的な様々な可能性を秘めた自然との関わりが失われてしまう。このことは、ある真理の現れの喪失となる。現代技術における挑発、徴用としての顕現も、ポイエーシスとしての顕現も、真理開示の方法であり顕現の様式である。しかし、ポイエーシスはあるものの固有性を発揮させるのに対し、挑発はそのものの存在を歪めてしまいかねないということを踏まえれば、やはりポイエーシスによって明らかになる真理がより根源的なものであるはずだ。総かり立て体制が支配をふるうところでは、根源的な真理の喪失という危機がある。

しかしそれだけではない。ハイデガーは、総かり立て体制が真理の現れだけでなく「顕現させることそのことを」（ハイデガー 2019a, p.135）つまり顕現それ自体を隠すのでであると述べる。この箇所には「根底的区別の忘却」²¹という書き込みがあることを頼りにして考えれば、それは次のことを意味すると考えられる。ポイエーシス的な真理の現れが失われることは、現代技術の挑発する顕現と、ポイエーシスとしての顕現の区別そのものが失われることを意味する。その区別が失われ、さらに忘却されるところにおいては、現代技術がテクネーに由来し、それが真理に至る道であることがもはや分からなくなってしまう。このことは、アレーテウエイン、顕現それ自体を隠してしまうことだといえるだろう。

以上により、最高の危機が示される。ポイエーシスとしての真理の現れが失われたところでは、顕現それ自体が見失われ、真理への関わりが絶たれてしまう。さらに人間は総かり立て体制の支配に気付くことができず、顕現が隠されている以上、真理への関わり喪失という事態にも気づくことができないだろう。危機を察することができれば、どうにかしてまだ対処の余地があるが、危機が危機として現れないところではただその危機に飲み込まれていくしかない。総かり立て体制による支配はこれらの危機を覆い隠し、人間が真理へ内省的に関わる機会を根本的に喪失しかねないために、最高の危機なのである。

結論

本論文で示されたことは以下のようにまとめられる。

第1章では、技術が真理を明らかにするはたらきを持ち、それゆえに顕現の様式であることが示された。それは、技術がポイエーシス的な活動であること、また、技術の語源が技術知テクネーに由来することから、技術は「こちらへと前にもたらし産み出すこと」であり、それが「隠れなさ」を真理だと定義するハイデガーの真理観と一致することから説明された。

第2章では、現代技術がそれまでの技術とは異なり、挑発という仕方で顕現させることが示された。そのことは、伝統的な橋が川の姿を尊重しつつ、周辺の景色と結びつけることに対し、ライン川の水力発電所が川の存在を水圧供給係へと埋没させてしまうことから見

²¹ ハイデガー 2019, p. 154 編訳者訳注 22 より。

で取れる。そして挑発されたものは、徴用物資として現れ出るに至る。このことは自然に限らず、人間もまた徴用物資として扱われているというハイデガーの主張が説明された。

第3章では、そのように人間をかり立てるのは総かり立て体制の支配によるものであること、そして総かり立て体制 *Ge-stell* がその成り立ちから、「立てることの集合」を意味し、それが戦時中の総動員体制を意識した語であることが示された。またハイデガーへの批判として、風車も自然のかり立てに該当し、さらに総かり立て体制は全ての技術に共通で、決して現代技術においてのみ固有なことではない、とする加藤の指摘について検討した。そのうえで、風車や芸術作品は自然を用いはずが、それは自然を徴用物資として現すことはいないため、風車や芸術はかり立てにはあたらないと退けた。

第4章では、近代自然科学もまた、現代技術のために徴用されたものであり、それゆえに近代自然科学において重要な仕事は、自然を力の連関として情報システムの中に置き換えることであることだ、というハイデガーの主張が説明された。そしてこれまでの議論を踏まえ、「現代技術とは何か」という問いに対して、それは総かり立て体制の支配によって進行する徴用して立てることの連鎖であり、自然や人間の一切を徴用物資に置き換えることである、という回答を与えた。

第5章では、総かり立て体制が「運命の巧みな遣わし」であること、そして総かり立て体制がもたらす危機について論じた。それは現代技術が人間の存在を危機へと陥れ、さらに真理の現れを立て塞ぐという危機をもたらすこと、さらにその危機が危機として現れてこない、という最大の危機の可能性である。

本論文では「技術とは何だろうか」の結論部、「救い」については扱うことができなかった。ハイデガーは「だが、危機のあるところ、／救いとなるものもまた育つ」(ハイデガー 2019a, p. 136) と、ヘルダーリンの詩を引用し、総かり立て体制下というこの危機的状況で、救いとなるものが芸術の領域の内に芽生える可能性を示唆する。それも、私たちが総かり立て体制の危機に直面する度合いが高まるほど、救いの可能性も高まるという。それは総かり立て体制の支配に最も接する時にこそ、人は運命の巧みな遣わしによっていっそう顕現させることへ遣わされているのであり、そこにはポイエーシスというより根源的な意味での顕現させることへ通ずる道があるはずだからだ。しかし今回は、救いに至る過程の一つひとつ、そして現代において救いとは具体的に何を意味するのか、ということについてまで問いを進めることができなかった。「救いとは何か」と問うならば、ハイデガーが求めた「技術と人間の自由な関係性」が、どのようなものであるかについても明らかになるはずである。

文献一覧

- アリストテレス (1971) 『ニコマコス倫理学 (上)』 高田三郎訳、岩波書店
- 加藤尚武編 (2003) 『ハイデガーの技術論』 理想社
- 國分功一郎 (2019) 『原子力時代における哲学』 晶文社
- 関口浩 (2021) 「こちらへと - 前に - もたらずこと / ポイエーシス」 (ハイデガー・フォーラム 編 『ハイデガー事典』 昭和堂、p. 331)
- 瀧将之 (2003) 「ゲ・シュテル (Ge-tell) の訳語について」 (加藤尚武 『ハイデガーの技術論』 理想社、pp. 145-8)
- ハイデガー, M. (2019a) 「技術とは何だろうか」 (『技術とは何だろうか 三つの講演』 森一郎訳、講談社学術文庫、pp. 95-156)
- ハイデガー, M. (2019b) 「建てること、住むこと、考えること」 (『技術とは何だろうか 三つの講演』 森一郎訳、講談社学術文庫、pp. 61-98)
- ハイデッガー, M. (2013) 『技術への問い』 関口浩訳、平凡社
- 古荘真敬 (2021) 「アレーテイア」 (ハイデガー・フォーラム 編 『ハイデガー事典』 昭和堂、pp. 286-7)
- 森一郎 (2020) 『核時代のテクノロジー論』 現代書館
- 渡邊二郎 (2008) 「歴史的現代の特徴づけとしての技術時代について - 特にヤスパースとハイデッガーの所説の対比を念頭に置いて -」 (千田義光、久保陽一、高山守 編 『講座 近・現代ドイツ哲学Ⅲ ハイデッガーと現代ドイツ哲学』 理想社、pp. 225-245)